

<活動報告>

助産師が児童養護施設の思春期女子に実践した 「いのちとからだのお話」における工夫と関わり

伊藤沙織

岩手県立大学看護学部

要旨

児童養護施設に生活する女子は、性に関する様々なリスクがある。一方で、性に関する支援は、対象者と支援者の関係性が重要である。今回 A 県 B 児童養護施設からの依頼で、助産師が中高生女子を対象に性や身体に関する保健指導である「いのちとからだのお話」を実践した。実践では、女子たちの特性に配慮した工夫や関わりによって、女子たちに変化が確認された。本報告は、実践記録であるフィールドノートや保健指導の前後の質問紙データから、研究者の行った工夫や関わりによって変化した女子たちの反応を振り返り、その工夫や関わりが女子たちにどのような意味があったのか、および今後の関わりの課題を考察した。そこから女子たちへの性の支援は、一貫した関わり姿勢によって丁寧に関係性を築くことや特性に配慮した工夫が必要であり、今後は、女子たちとアタッチメント関係を構築し、退所後を含めた支援を整えていくことが課題であることが明らかとなった。

キーワード：児童養護施設、思春期女子、助産師、いのち、からだ

はじめに

児童養護施設は、児童福祉法に定められた児童福祉施設の一つであり、保護者との離死別や保護者からの不適切な養育等のさまざまな理由で、保護者からの養育が困難な2歳からおおむね18歳の児童たちが生活をする施設である。児童には安定した生活環境の中で心身の健やかな成長と発達を保障し、その自立までを支援する機能がある。厚生労働省の児童養護施設入所児童等調査(2018)によると、児童養護施設に入所している児童の数は27,026人で、そのうち65.6%の児童が被虐待経験があり、その割合は増加傾向である。牧田他(2018)は、児童養護施設の中高生のアタッチメント・スタイルと特性不安の関連の調査により、児童養護施設で生活する思春期世代の中高生は、家庭で生活する中高生に比べて、アタッチメントスタイルのアンビバレント型と回避型が多く、特性不安が高く、特に男子よりも女子の方が特性不安が高いという結果を得ている。つまり児童養護施設で生活する思春期の女子は、同じ年代の男子と比べても、人と

の関わり方が不安定で、不安の中で日常生活を送っていることが分かる。ほかにも児童養護施設で生活する児童は、愛着障害を根底とした心理社会的問題が多く生じることが先行文献で指摘されている(鈴木他, 2002; 石, 2006; 出野, 2008; 庄司他, 2008)。鈴木他(2002)は、児童養護施設で生活する女子で入所時に問題ありとされた女子は、同年代の女子に比べ「不良交友」や「性的非行」が有意に高いと報告している。またHerman(1992)は被虐待経験のある女性は、レイプ、性的ハラスメント、殴打の危険率は一般女性より倍増することを指摘している。このことから、児童養護施設で生活する女子は、将来社会に出ても、性の商品化や性暴力やDV、予期せぬ妊娠や出産などの性的な問題を抱える傾向が強く、性に関する様々なリスクを抱えている。このような現状は、女子が性の健康問題を抱えることや被害を受けることだけでなく、虐待の連鎖や貧困により次の世代にもそのリスクが及ぶ危険性がある。そのため児童養護施設に生活する女子は、将来にわたるリプロダクティブ・ヘ

ルス（性と生殖の健康）問題のリスクが高いと言える。福島（2018）は、リプロダクティブ・ヘルスの基盤となる基本的心理欲求の充足や性に関する自己決定の促進には、支援するものとのあたたかい関係性を築くことが重要であると述べている。児童養護施設女子との関わりでは、母親のように献身的な姿勢で丁寧な関係づくりを行いながら安全な関係を築き、同じ女性として性との向き合い方や付き合い方を伝えていくことが、女子たちの抱えるリスクの軽減につながると考えられる。

しかし、児童養護施設の女子は母親と暮らした経験が少ないが故に、性についての家庭内教育を受けた経験が極端に少なく、リプロダクティブ・ヘルスに関する様々な知恵の伝承がされにくい環境にある。またその一方で、児童養護施設職員は、性に関する指導に「困難さ」を感じている（榊原他，2010）ことや、集団養育の環境においては問題行動の管理や統制が優先されがちで、個々のニーズに沿ったケアは難しい（藤林，2016）ことが報告されている。従って施設職員が性の健康問題を予防する支援を行うには限界があるといえる。友田他（2008）は、児童養護施設のリプロダクティブヘルスケアには、施設職員だけでなく、医療専門職との連携が必要となってくると述べている。柚山（2017）も、看護職は児童養護施設職員と連携し、子どもの特徴に配慮した性（生）に関する支援を行う必要があるとしている。また、福島（2016）は、児童養護施設に生活する女子への身体の話を通して助産師の受容的、共感的な関わりは、自分の体を心配し、理解しようとする存在として経験されており、女子自身の存在価値を確認することにつながることを示唆している。これらのことから、看護専門職が身近で寄り添いながら性の教育を行い、命の誕生から身体的・精神的な発達、性の自己管理の方法等について正しい知識を伝えるとともに、性との向き合い方を女子たちとの関わりの中で伝えていくことが、女子たちのリプロダクティブヘルスの向上や、自尊感情を高めることにつながるといえる。

しかし児童養護施設での性教育については、伝える内容がプログラム化されたものや知識の定着度を調査したものが多く、助産師の関わりや関わるうえでの配慮や工夫について具体的に述べられているものは少ない。

今回、研究者は助産師の立場で、児童養護施設の思春期女子を対象として、性や身体に関する「いのちとからだのお話」を実施する機会を得た。そこでは、母

親との生活経験が少ない女子たちの特性に配慮し、女子たちが家庭的な雰囲気の中で安心できるような工夫や関わりを行った。そこで、「いのちとからだのお話」に参加した女子たちと研究者の関わりの実際と関わりの中での女子たちの変化を振り返り、児童養護施設の思春期女子の特性に配慮した工夫や関わりが、女子たちにどのような意味があったのかを考察し、今後の課題を明らかにした。

目的

児童養護施設の女子たちの特性に配慮した助産師による「いのちとからだのお話」の工夫や関わりの実際と女子たちの変化を明らかにし、女子たちにもたらされた変化の意味、および女子たちとの関わりにおける今後の課題を考察する。

用語の操作的定義

1. いのちとからだのお話

児童養護施設にて行われる、女性の性と生殖の専門知識を持った助産師を講師とした性やからだに関する保健指導のこと。この指導で助産師は、対象となる女子たちに受容的・共感的姿勢で関わり、どのような反応に対しても母親のように献身的な姿勢で女子たちと向き合う。この「いのちとからだのお話」を実施することを通して、女子たちが性や生についての知識を得るだけでなく、自分のありのままの存在を認め自己を大切に思うことや自己の性の受容を促すことをねらいとする。

2. 思春期女子または女子たち

児童養護施設で生活をしている、「いのちとからだのお話」の参加者となる中学・高校生の女子のこと。

方法

1. 「いのちとからだのお話」実践に至った経緯

実習指導で出入りのあった、A県内のB児童養護施設において、研究者は施設職員より、入所児童について基本的な性に関する知識不足、性行動の乱れ等の課題があることの相談を受けた。施設職員からの性や生に関しての指導は、知識や技術が少ないことや、性に関する内容は身近な施設職員からの指導では入所児童が聞いてくれない等の理由により、実施が難しい現状であった。入所児童は自分を大切にしない気持ちも低いという現状もあり、単に知識を伝えるだけではない伝え方や関わり方の工夫も必要だと考えられた。この

ことから研究者が依頼を受け、思春期女子を対象に、一人の助産師として、女子たちの特性に配慮した性や身体に関する「いのちとからだのお話」を実施することとなった。

2. 研究参加者

「いのちとからだのお話」に参加し、研究協力に承諾が得られた中学生と高校生の女子。研究参加者は普段、B 児童養護施設内の年齢別ユニットや施設に隣接するグループホームで生活をしている。

3. 実施時期

令和2年2月～3月

4. 施設との事前打ち合わせ

事前に施設職員と、複数回打ち合わせを行った。打ち合わせでは、対象となる女子たちの年齢、人数、特徴について情報を共有し、関わる際の注意点を確認した。注意点の具体的な内容は2点あり、1点目は、女子たちがどのような反応を示しても、研究者、施設職員ともに女子たちのみせる反応に受容的な姿勢で関わり、女子たちの反応や態度に対する注意等は行わないことであった。2点目は、女子たちの持っている性に関する知識や、男女交際の経験に個人差があるため、女子たちの経験談等が話題になった際に、研究者や施設職員が過度に驚いたり否定的な反応をみせたりせず、これについても受容的、共感的な姿勢で関わることであった。そして、回数や実施時間、お話の内容についても、施設職員の要望をできるだけ取り入れながら決めていった。

5. 「いのちとからだのお話」の構成及び内容

1) 構成や時間帯、実施場所

「いのちとからだのお話」は、個別ではなく小集団を対象とし、日時を変えて2回の構成で実施した。1回目は、中学生と高校生を一緒に実施する内容とした。2回目は、中学生と高校生で伝える内容が異なるため、同日に別々の時間帯で実施した。実施の時間帯は、参加しやすい休日の夜の時間帯に設定し、女子たちが飽きないように1回1時間程度の内容とした。場所はいずれも、B 児童養護施設内の多目的スペースで実施した。

2) 指導内容と方法

施設職員から、1回目の指導は、命の尊さや生きて

いることの素晴らしさを感じられる内容にしてほしいとの要望があった。そこで、1回目の保健指導は、全員を対象として、今まで頑張ってきたことを労い、今生きていることの尊さや女子たちの存在そのものに価値があることを言語化して伝えた。

2回目の指導内容は、施設職員から、中学生と高校生とでは異なる要望が出された。中学生への指導内容は、衛生用品の清潔・不潔の内容を含めた取り扱い方についてであった。高校生への指導内容は、月経周期と自己管理についてであった。そこで、中学生の指導では、衛生用品に触れたり、衛生用品の扱い方のデモンストレーションを交えたりしながら伝えた。ここでは、使用済みの衛生用品の包み方や入浴後の衛生用品の装着の方法などの生活に根差した内容を取り入れるように心掛けた。また、高校生への指導では、衛生用品に加えてコンドームなどに触れながら、包装袋の開け方や取り扱いの注意点などを伝えた。ここでは、女子たちが実際に想像でき、生活に活かせるように伝えた。

保健指導全体を通して、妊婦ジャケットの装着や新生児人形の抱っこ、タンポンが水の中でのどのように広がるかの実験など、体験学習の場面を多く取り入れながら女子たちの興味関心を引き付ける工夫をした。内容の検討にあたっては、施設職員との打ち合わせを重ねたほか、アドバイザーとして県内で性教育活動を行い、児童養護施設においても性教育活動を行った経験のある助産師から、教材の選び方や使い方、女子たちとの関わりの工夫についてアドバイスを受け、内容に反映させた。

3) 指導教材

教材は子宮内膜の厚さが変化する模型、在胎週数別の胎児の大きさの違いが分かる模型、新生児人形、妊婦ジャケット、資料（月経記録、基礎体温記録表）、コンドーム、衛生用品、腹巻等の冷え対策に使用するもの、パワーポイントを使用した。

4) 実施する際の基本的姿勢

研究者は、施設職員との事前の打ち合わせにて、女子たちの特性に配慮し、女子たちが安全を感じられる関係づくりを行うことが、アタッチメント形成や自尊感情への働きかけに必要であることを共有した。そのような経緯から研究者は、母親のように温かく献身的な態度で女子たちに関わることが有効だと考え、女子たちが安心を感じられるように、家庭の場としてのリラックスした雰囲気を壊さないように指導を行うことを提案し、施設職員の賛同を得た。関わりの基本的な

姿勢については、助産師の職業や専門性について説明したうえで、女子たちに対して可能な限り自己開示をしながら笑顔で明るくふるまうこと、女子たちの言動を否定せずに受け止め、傾聴しながら理解を示すこと、なるべくポジティブな声掛けを行うこと、目線の高さを合わせながら時にはタッチングを行い、優しい口調で語りかけることであった。この関わりの姿勢については、過去の文献から被虐待児やアタッチメント障害のある児童への関わり方を参考とした。

6. データ収集と分析

1) フィールドノート

研究者は、1回目、2回目それぞれの「いのちとからだのお話」での女子たちの様子を、女子たちの反応や様子、研究者の言動、感じたこと、関わりの工夫について分けてフィールドノートに記録した。このフィールドノートは、実施後できるだけ早期に研究者自身が記録した。記録する際は、女子たちの否定的な反応等も含めたありのままを記録するようにし、主観的な記録とならないよう心掛けた。この記録から、研究者とのやりとりの中で女子の変化が感じられた場面を抽出し、関わりの工夫、女子たちの反応、研究者の働きかけ、女子たちの変化を前後の文脈から丁寧に読み取った。

2) 参加者への質問紙調査

「いのちとからだのお話」実施前後で、参加者を対象とした無記名自己記入式質問紙による調査を行った。質問紙の内容は、属性および将来の夢を自由記述で尋ねる項目とした。また、「いのちとからだのお話」実施後には受講の感想を自由記述で問う項目を加えた。その他質問紙には、Rosenberg (1965) の自尊心尺度を山本他 (1982) が邦訳したものや、自作の自身の身体や女性性の認識を visual analog scale で問う項目も入れていた。しかし、「いのちとからだのお話」1回目の後に予定外の中学生1名の退所があり、無記名での調査のため2回とも継続して参加した個人が特定できなかったことから、平均値の前後の変化を統計学的に処理できなかった。そのため、今回はこれらの尺度の結果は用いず、自由記述の記載内容のみ結果として用いた。自由記述内容は何度も熟読し、記述された言葉を大切にしながら、「いのちとからだのお話」に参加した女子が、お話の内容や関わった助産師について感じたことや思ったことがどういふものであったのか、丁寧に読み取っていった。また、記述の前後の文

脈やフィールドノートの記録も参考にしながら、その意味も丁寧に読み取っていった。

質問紙の配布は、「いのちとからだのお話」の1回目を行う1週間前にB児童養護施設にて研究者が行った。研究者が、女子たちに質問紙、説明書、封筒を配布し、注意点等を口頭にて分かりやすい言葉を用いて説明した。回収箱は、期限を設けて施設内に設置し、研究者が回収箱の撤去を行った。「いのちとからだのお話」実施後の調査は、「いのちとからだのお話」の2回目の終了後に行った。質問紙の配布、説明、回収については1回目の調査と同様の方法で行った。

7. 倫理的配慮

本研究は、岩手県立大学研究倫理審査委員会にて承認を得た(承認番号:258)。研究対象者への説明を行う前に、対象者の保護者代理であるB児童養護施設の施設長に研究の主旨、目的、方法について研究者自身が説明し、研究協力の承諾を求め、承諾書に施設長の署名、捺印をいただいた。研究の対象者へは、研究者自身が研究の意義・目的・方法・倫理的配慮・結果の公表について説明した。参加は自由意志であること、不参加による不利益はないこと、質問紙は無記名であり、得られたデータは研究者が責任をもって管理・処理し、研究以外には用いないこと、プライバシーの保護に留意し個人や施設が特定されることがないこと、回答は回答者自身が質問紙と一緒に配布した封筒に入れ回収箱に投函することで本研究に同意したとみなすことを、ゆっくりと分かりやすい言葉を用いて説明した。また、質問紙の投函後は回答の取り消しができないことを強調して説明した。

結果

1. 対象者の属性

1回目の参加女子は、計9名で、中学生4名、高校生5名であった。そのうち中学生女子1名が退所となったため2回目の参加女子は、計8名で、中学生3名、高校生5名であった。女子たちの施設への入所年齢は5~11歳、入所期間は2~13年であった。(表1)

表1. 対象者の属性

	中学生女子	高校生女子
参加人数	1回目	4名
	2回目	3名
入所年齢	5~11歳	
入所期間	2~13年	

2. 女子たちとの関わりに向けた環境作りと工夫

1) 「いのちとからだのお話」1回目

(令和2年2月23日(日) 19:00~20:00)

1回目は、中学生と高校生を対象とし、施設職員2名も一緒に参加した。席は女子と研究者がテーブルを囲んで座るように配置した。研究者もなるべく椅子に座りながら話すよう心がけ、女子たちと視線が合いやすいようにした。施設職員は、要望により少し離れた位置から見守っていた。テーブルには、お菓子と飲み物を人数分用意し、それを口にしながらか参加して良いことを伝えた。指導内容は「生命誕生の成り立ち」「男女のからだの違い」「いのちの大切さ」とした。模型やパワーポイントを使用してプライベートゾーンや内性器についての正しい知識を学びながら、教材を手にとったり、教材を身体にあててみたりすることで、自身の身体のこととして想像できるよう工夫した。また、女子たちが女性の身体の変化やいのちの尊さを感じられるように、妊婦ジャケットや新生児人形を使用した疑似体験を行った。

2) 「いのちとからだのお話」2回目

2回目は、中学生と高校生を同日の別の時間に分け、それぞれに施設職員が1名ずつ参加した。1回目同様に施設の多目的スペースで実施した。配置は、施設職員を含む参加者全員が机を囲むように座り、女子と視線の高さを同じにして1回目よりもさらに近い距離で会話ができるようにした。2回目は、衛生用品の紹介等で机の上に並べる物品が多くなったため、紹介が終わったあとに、お菓子と飲み物を女子たちに出した。

(1) 中学生女子

(令和2年3月8日(日) 19:00~19:50)

中学生女子への内容は、施設職員からの要望を踏まえ「月経周期」「月経時の手当」とし、カレンダーを使用した月経周期の教え方や衛生用品の紹介をした。タンポンが水を吸ってどのように開くのか実験したり、衛生用品の取り扱い方についてデモンストレーションを行ったりするなど、実践的に学ぶことができるよう工夫した。月経時の注意点やトラブルの対処法などを伝える場面では、施設職員や研究者の体験談等を交えることで、同じ女性としての話題を身近な女性と行う経験ができるようにした。また、お菓子や飲み物に手を出しながら、家庭のような雰囲気でも話しができるよう工夫した。

(2) 高校生女子

(令和2年3月8日(日) 20:00~21:00)

高校生女子への内容は、施設職員からの要望を踏まえ「月経周期」「避妊」とし、カレンダーを使用した月経周期の教え方に加え、基礎体温の変化や排卵日予測を行い、衛生用品や冷え対策に使用するもの、避妊具の紹介等を行った。タンポンがどのように開くのか、コンドームはどのようなものなのかを女子たちが実物を手に取りながら理解できるように工夫した。後半は、お菓子や飲み物を囲み、女子たちがリラックスできる雰囲気作りを行った。女子同士のコミュニケーションを遮らずに、普段から行っている会話の延長で性についての疑問や気づきを共有できるように工夫した。

3. フィールドノートの記録

フィールドノートの記録から、研究者とのやりとりの中で女子たちの変化が感じられた場面を抽出し、研究者が行った関わりでの工夫、女子たちの反応、研究者の働きかけ、女子たちの変化を前後の文脈から丁寧に読み取った。それを以下に示す。

1) 「いのちとからだのお話」1回目

(1) 最初のあいさつの場面での様子

最初、女子たちに、助産師とは何をする人なのか、どういう職業なのかを交えて自己紹介を行ったが、その際、女子たちは視線をそらしたり、下を向いて全く顔をあげなかったり、こそこそ話しをしながらこちら(研究者)を見て笑ったりしていた。しかし、一人の高校生女子から「緊張してるでしょ。」と聞かれ、正直に緊張していることを伝えたところ、笑いが起こり、一気にその場が和んだ。その後、高校生の女子たちからの反応や発言が増え、女子たちのほうから冗談を言って茶化したり、みんなで笑えるようになっていった。

この場面では、緊張していることを指摘された研究者が、素直な気持ちを女子たちに話し、自己開示をしたことで、研究者自身も緊張がほぐれ、それによって場の緊張感が緩み、雰囲気が和んだことがわかる。このやりとりをきっかけとして、高校生女子の反応や発言が増えていった。

(2) 体験学習の場面での様子

次に、妊婦ジャケットの着用や新生児人形の抱っこ体験を行った。その場面で女子たちは、席から立ちあがって他の女子の所へ自由に行き来したり、楽しそうに参加していた。その中で「やだー、重いー。何でこんなにお腹が出ての。」と言いながら妊婦ジャケットの腹部を乱暴に拳で叩いている高校生女子がいた。研究者が一方の手を女子の肩にのせ、もう一方の

手でその女子の手を取り、寄り添うように一緒にお腹に触れながら、「ママのお腹の中ってあったかくて気持ちがいいな。」と幼い子どもに話しかけるように言葉をかけると、その女子は「あったかくないよ。うち暑がりでいっつもお腹出して寝てるもん。」と言いつつも、叩いていた腹部をなでるようになった。そしてジャケットを外そうとせず、最後まで腹部をなでながら着用していた。

新生児人形の抱っこでは、人形の首をつかんで左右に揺らしながら「結構重い。」と言って乱暴に重さを確かめている中学生女子がいた。研究者は「おぎゃーおぎゃー。」と新生児が泣いている真似をして、女子の背部を包み女子の手を取り、一緒に人形の頭を撫でながら、女子に新生児人形に名前をつけることを提案した。名前は教えてくれなかったが、その後女子が新生児人形を包み込むように抱きながら頭をなでている様子がみられた。

研究者は、体験学習の場面で妊婦ジャケットや新生児人形を乱暴に扱う数名の女子たちを無視せず、むしろ丁寧に個別に向き合うようにした。また、研究者は、女子の行動を無理に止めずに、女子たちに寄り添うようにタッチングや言葉かけを行った。女子たちは、この研究者の関わりをきっかけにして、“命”をイメージできる妊婦ジャケットの腹部や新生児人形に対し、乱暴な行動から優しくいたわるように自らの行動を変化させていた。

(3) 中学生女子との関わり

高校生女子は、研究者との関わりで時間経過とともに発言や反応が多くみられるようになった。一方で、中学生女子は遠慮している様子があり、発言や反応も高校生女子に比べると少なかった。研究者は、中学生女子に全体の場での発言は無理に求めずに、個別の声かけを多くするようにした。声かけの際は、顔を見て微笑みかけ、中学生女子の発言を急かさないうちにゆっくりとした口調で話し掛けた。基本姿勢に加えて、このような関わりを繰り返すうちに、中学生女子は、うなずきや微笑といった反応をみせたり、研究者に視線を送ることで研究者の反応を求めるしぐさをみせたりするようになった。

ここでは、高校生女子と中学生女子の対照的な反応に合わせて、研究者が関わり方を変えていることが分かる。研究者は、中学生女子の反応が少ないことを無視せず、遠慮や恥ずかしさに配慮しながら、個別に話を聴く姿勢をみせた。そのような関わりを継続するこ

とで、中学生女子は、終始発言は少ないものの、しぐさや視線を送るという方法で、研究者に対して反応をみせるように変化していた。

2) 「いのちとからだのお話」2回目

(1) 中学生女子とのやりとり

①衛生用品などの紹介場面での様子

月経についての説明を簡単にした後、衛生用品や冷え対策に使用するものの紹介を行った。事前に、柄やデザインが異なるものを用意し、女子一人一人にいきわたるように配置し、女子の好きな席に座るようにした。女子たちは並べてある衛生用品などを手に取ってみたり、「これ(タンポン)開けてみていい。」と研究者に聞いたり、「これかわいい。」「このほわほわが好き。」と女子同士や施設職員と話しをしていた。女子たちは、研究者から「この色はあなたに似合ってるね。」や「私もこれいいなと思ったよ。」などと声をかけられると、施設職員と顔を合わせて照れるように微笑んだり、「うん、かわいいよね。」と同調したりする反応がみられた。女子たちは1回目より興味関心が高い様子があり、自分の好みものを選び、それを手に取ることを楽しんで行っており、自然な反応や笑顔がみられた。

この場面では、女子たちは自分のものが用意されていることを喜び、好みものを選ぶことを楽しんでいた。研究者が個々にポジティブで肯定的な声掛けを繰り返し行うことで、女子たちは1回目よりも緊張が少なくリラックスできている様子で、微笑む、笑う、自ら発言するなどの反応を示すように変化していった。

②ナプキンの付け方・捨て方のデモンストレーションの場面での様子

研究者からの月経等の質問に対し、女子は下を向いたり目をそらしたり、首をかしげて答えようとしなかった反応をしていたが、デモンストレーションの場面では顔を上げてしっかりとみている姿がみられた。研究者と施設職員が自身の月経時の体験談や失敗談を話しながら、女子の様子を頻繁に確認するように視線を合わせたり、顔を覗き込むようにしたりすると、女子は発言はしないもののニコニコしながらその場に参加して体験談を聞いている様子が見られた。

月経の手当てなどを話題にしたこの場面では、女子たちは最初恥ずかしがるような反応をみせるが、施設職員と研究者が会話に招き入れるような姿勢をみせることで、表情が穏やかになり、大人の体験談に聞き入り、参加している様子が見られた。

③その他

女子たちは「(タンポンの実験) やってみたい。」や「(同席した施設職員に対し) うちもこういうのが欲しいんだよ。」という自身の要望を伝える場面がみられた。

「いのちとからだのお話」を通して、施設職員や研究者が女子たちに受容的な反応を返し続けることで、中学生女子は「いのちとからだのお話」への参加を受け入れ、その中で自分の素直な思いや要望を表出できていることがわかる。

(2) 高校生女子とのやりとり

①月経周期、排卵日の予測を伝える場面での様子

女子たちは真剣に周期を数えながら、「でも排卵って実際見れないからいつしてるか分からないよね。」と気づきを発言し、「たしかに。」と女子同士で共感していた。研究者から「すごくいい気づきだね。じゃあ排卵日がはっきり分からないということは、私たちはどうすればいいかな。」と問いかげられると、「うーん。」と考えているようにして、1人の女子が「やらない(性行為をしない)のが一番でしょ。」と言って、女子全員で少し恥ずかしそうに笑い合ったりしていた。

この場面からは、女子たちが日常のリラックスした雰囲気の中で月経や排卵という自分自身の身体現象に関心を向け、女子同士で考えを深められていることが分かる。そこにさらに研究者が女子の言動に肯定的な言葉かけを行うことで、より自身の取るべき行動についての想像が促されていた。

②まとめの場面

最後のまとめでは、研究者が、女子一人一人の腹部に手を当ててさすりながら、「あなたは大切な存在だから、ここ(子宮)を大切にしてくね。」と伝えた。女子たちは「あったかい。」「人に触られると変な感じ。」と笑顔になる一方で、「やだー、うち大切じゃないもん。」や「えー、どうでもいいよ。」と発言する女子もいた。研究者が「そうか、自分のこと大切じゃないやどうでもいいって思うんだね。」と伝え、「それでも私(研究者は)〇〇ちゃんに元気でいてほしいから大切にしてほしいな。大事、大事。」と女子の肩から腕にかけてゆっくり優しくさすりながら言った。そうするとその女子たちは直前まで他の女子を茶化して笑っていたが、急に静かになってうつむくような反応がみられた。

このように、まとめの場面では、女子たち一人一人の存在を大切に思う気持ちを込めて、研究者が腹部にタッチングをする、という実践を行った。自身のことを「大切ではない。」「どうでもいい。」と否定的に表

現する女子には、その発言を否定せずタッチングを続け、女子の存在を肯定する言葉がけを行った。触れられながらうつむく女子の様子から、自己の存在を肯定される言葉に、何かを考えながらじっと耳を傾けていることが読み取れる。

③「いのちとからだのお話」終了後の様子

お話が終了しても、女子たちは5人とも部屋に残り、お菓子や飲み物を口にしながら、学校が春休み中で友達に会えなくてつまらないこと、以前交際していた彼氏との関係がめんどくさくなって数か月前に別れたこと、退所後が楽しみであるが、就職してうまくやっていけるか不安なことなどを研究者と話し続けた。研究者は笑顔でうなずいたり驚いたり、彼女たちの話に適時リアクションをとりながら、傾聴した。研究者が帰る際には、女子たち自らが荷物を運んでくれたり、施設の玄関で見送りをしてくれたり、研究者と最後まで関わる様子が見られた。

このように、講話が終了した後も女子たちはさまざまなことを話し、研究者に対して自己開示を行っていた。女子によっては施設を退所することを想像し、それによって揺れ動く心理状態までも表出していた。研究者が受容的、共感的に聞く姿勢をみせることで、生活周囲にあるプライベートな内容の話をしたり、将来を想像しながら期待や不安を吐露したりと、女子たちが安心して内面を表現するように変化したことがわかる。

4. 「いのちとからだのお話」実施前後の対象者への質問紙調査の結果

1) 質問紙の回収率

(1) 「いのちとからだのお話」実施前

9部配布したうち、9部の質問紙を回収した(回収率100%)。そのうち1部の回答が全て無回答だったため、8部を有効回答とし分析対象とした(有効回答率89%)。

(2) 「いのちとからだのお話」実施後

8部配布したうち、8部の質問紙を回収し(回収率100%)、全ての回答を分析対象とした(有効回答率100%)。

2) 自由記述の回答

(1) 将来の夢について

将来の夢については、実施前に“まだ決まっていない”も含め回答があったのは4名だったが、実施後の回答は7名で回答人数の増加がみられた。回答の内容は、具体的な職業名を記入しているものから、

表 2. 将来の夢

実施前	実施後
<ul style="list-style-type: none"> ・美容師 ・社会福祉士か歯科技工士 ・パティシエール ・まだ決まっていない ・無回答 4 名 	<ul style="list-style-type: none"> ・パティシエ ・パティシエか調理師 ・幸せに結婚する, いい人みつける ・社会福祉士か歯科技工士 ・自由 ・調理 ・ヘアメイクアップアーティスト ・無回答 1 名

表 3. 「いのちとからだのお話」終了後の感想 (自由記述)

<ul style="list-style-type: none"> ・体も命も大切ということを知りました。(14 歳) ・とてもためになった。また受けたいと思う。いろいろとおしえてくださりありがとうございます。(年齢記入なし) ・知らないこともあってためになりました。タンポンとか。(18 歳) ・よかった。(15 歳, 18 歳)

“自由” というような抽象的な表現で記入しているものもあった。(表 2)

(2) 「いのちとからだのお話」終了後の感想

受講後の感想は, 5 名からの回答が得られた。回答の内容は, “またうけたいと思う。” と継続した関わりを望んでいるものや, “体の命も大切ということを知りました。” というものだった。(表 3)

考察

フィールドノートの記録を丁寧に読み取った結果, 2 回の「いのちとからだのお話」を通して, 研究者の工夫や関わりをきっかけとして女子たちが変化したことがわかる。今回の「いのちとからだのお話」では, 性や生に関する知識の提供だけでなく, 家庭的な雰囲気を感じられる工夫を行い, 温かく献身的な態度と受容的共感的な姿勢で女子たちと関わることを基本姿勢として取り組んだ。そのような姿勢を大切に工夫や関わりがあったことにより, 女子たちとのやりとりの中に相互作用が生まれていった。質問紙での調査結果より, 将来の夢について実施後に記入人数が増え, 実施後の感想で肯定的な意見が得られた。このことから, 「いのちとからだのお話」を通じた研究者の工夫や関わりが, 女子たちにとって自己の命や身体, 将来について意識を向ける機会となったことが分かる。これらの結果をもとに, 研究者が女子たちの特性に配慮しながら行った工夫や関わりが, 女子たちにとってどのような意味を持つ関わりであったのか, および女子たちと

の今後の関わりにおける課題について考察していく。

1. 事前の準備や打ち合わせを綿密に行うこと

家庭では自然発生的に性の教育が必要とされる場面があり, 主に母親から性についての知識や対処法などが伝授される。しかし児童養護施設では, そのような場面があっても, タイムリーに指導することは難しく, 児童養護施設で行われる性についての保健指導は, 家庭の日常生活に近い場面や内容を特別に作らなければいけない。古川 (2008) は, 助産師が児童養護施設で行う性教育の準備には, 職員と助産師の事前打ち合わせを綿密に行う必要があるとしている。また, 社会的養護について庄司他 (2008) は, 家庭的環境 (あるいはより家庭に近い環境) を用意することは, 子どもとのより緊密な人間関係を構築することにつながることを指摘している。「いのちとからだのお話」においても, 施設職員との事前の打ち合わせを複数回行い, 内容や回数, 教材等を検討したことに加え, どのような雰囲気で行うか, そのような雰囲気にするにはどのような姿勢で女子たちと関わり, どのような工夫が必要であるかを打ち合わせた。女子たちは, 夕食後のプライベートな時間帯に普段の慣れた生活場所で, リラックスできる服装にて「いのちとからだのお話」に参加した。また, 「いのちとからだのお話」は, 一方的な指導の場ではなく, 普段の生活を共にする顔なじみの女子たちや施設職員とともに, お菓子を食べながらお話ができる環境であった。このように事前の打ち合わせや準備を綿密に行うことによって, 保健指導の場が女子たちの日常に近づき, リラックスした雰囲気が作られていたと考える。実際に, 1 回目のあいさつの場面で, 女子から研究者の緊張を指摘して笑いが起こる場面は, 女子が “自由な発言をしても良い” 雰囲気を感じたことによる言動だったと推察する。前述したように, 人との関わりが不安定で不安が強い中で生活を送っている児童養護施設の女子たちにとって, 普段の日常と変わらない環境を作ることには, 安全な場にいられるという安心を得られる意味があったと考える。加えて, その安全な場にいる研究者の存在に対しても危険を感じにくくする意味があったと考える。一方で, 同じく女子たちが研究者の緊張を指摘する言動は, 女子たちが研究者の反応を試す行為であったともいえる。被虐待経験のある人は, 家族や他の対人関係から裏切られる経験をしており, 拒否されることや裏切られることを先読みし, 人を信じられ

ない傾向がある (Cruz 他, 1994). また, アタッチメントに問題があると, 他者を信用できず回避したりする行動によって他者関係が阻害されることがある (庄司, 2008). これらのことから, 女子たちは他者を信じられない傾向にあったことが推察され, そのために研究者を試すような発言をし, それに対する研究者の言動を観察していたと考える. この女子たちの反応についても, 事前に打ち合わせた基本姿勢を継続することで, 女子たちは“自分のことを受け入れ肯定してもらえ”感覚を体験したと推察する. この体験は, 他者を信用することが難しい女子たちにとって, 安心や安全を感じることにつながる関わりであったと考える. 被虐待経験のある人に対する性教育について, 支持的で承認され続ける関係性の中で正しい性の知識提供を行うことが重要である (Cruz 他, 1994) とされ, 性の指導を行う前提には, 対象者が安心できる関係性の構築が必要である. 女子たちの特性に配慮した関わりの基本姿勢や工夫を, 事前に綿密に打ち合わせて準備を行ったことで, 女子たちに不安や危機を感じさせない一貫した態度で関わるのができたと考ええる.

2. 女子たちが肯定的な自己感を育むための関わり

被虐待経験によってアタッチメントに問題がある子どもは, そのトラウマとなった経験によって自己感の発達全てに大きな影響を与えていることがある (庄司他, 2008). 不適切な養育環境で自己感の発達が抑制されたり, 否定的な自己概念が内在化されていたりすることに対して, 山下 (2019) は, 感情や身体的気づきにアクセスできる自律神経や感覚運動レベルに働きかける治療法の有用性を示唆している. また, Kolk 他 (1996) は, トラウマへの治療的関わりとして, 現実との接触を回復するのを援助するために, 身体的接触が有効であることが多いとしている. 関わりの中で, 女子たちは自身のことを「大切じゃない」「どうでもいい」と表現していることから, 自分という存在を否定的に捉えていることが推察される. 研究者が女子たちの身体に触れ, 寄り添いながら優しく語りかけことで, 女子たちは, 温かさを感じ, 他者から自分を大切にされる感覚を体験したことが推察される. このように, 研究者が寄り添いやタッチングをおこなったことは, 女子たちの混乱した自己感の統一に向けたアプローチとなることが示唆され, このケアの継続によって女子たちの否定的な自己感の改善につながる

考える. 福島 (2018) は, 助産師によって, 自分の身体感覚を肯定的なものとしていくケアは, 女性の身体に対する支援だけではなく, その女性の存在を肯定し, 生きる力を引き出す支援となりうる可能性を示唆している. このことから研究者の行った関わりは, 女子たちにとって触れられている身体が肯定されたと同時に, 自己の存在も肯定されたと感じられる経験となったと考える. このような関わりでの積み重ねによって, 女子たちの肯定的な自己感の統一を促すこととなり, 自身を大切な存在だと思えるようになることが示唆される. そしてアタッチメントの問題で, 自己感が統一されないことの中には自己の連続感の発達が困難になることも含まれ, 長期的な展望にたった行動をとることができない (庄司他, 2008). このことから愛着の問題は, 自分という存在を将来も続いていく存在として捉えることを困難にさせることが分かる. 児童養護施設の女子たちにおいても同様の傾向があることが推察され, このことが前述したような性のリスクにつながっている可能性がある. 「いのちとからだのお話」後には, 将来の夢について記述人数が増えていた. これは, 「いのちとからだのお話」での受容的共感的な関わりによって, 女子たちに自己への肯定的な思いが生まれ, 自身の将来を意識する機会となったことが示唆される.

さらに庄司他 (2008) は, アタッチメントの治療は, 関係性の治療であり子どもだけを対象に治療を行っても関係性の治療が進むわけではないとしている. 実際にフィールドノートの記録からも女子からの発言をきっかけとして, 自己開示ができるようになった研究者自身の変化が記されていた. 女子たちとの関係性の構築を期待する場合, 関わる立場のものも自身が変化することを受け入れ, 女子たちと向き合う姿勢を見せ続けることも必要だと考える. これによって, 女子たちは安定した安心のなかで, 肯定的な自己感を統一していくことができるようになると考えられる.

3. 女子が自身の存在を肯定的に感じられる工夫

児童養護施設に生活する中高生女子は, 他者を全面的に信用できなかつたり, 自分を信頼できなかつたりする傾向 (牧田他, 2018) があることや, アタッチメントに問題がありトラウマがある子どもは, 守られていない自己という感覚を強く持っている (庄司他, 2008) とされている. 「いのちとからだのお話」では, お菓子や飲み物, 一部の教材を人数分用意し, 女子た

ちが自分の判断で好みに合ったものを選ぶように工夫した。そのような工夫は、女子たちに“自分専用のものが用意されている”感覚や“自分を気にかけてくれている”感覚をもたらし、“他者に思われている自分”という存在を感じられる意味があると考えられる。また、Cruz 他 (1994) は、被虐待経験がある人は、自分の欲求をみたくことや自分の欲求を認識できないことがあり、他者に欲求を伝えることが難しいことを指摘している。同じく、このような人には感受性、共感的同調、勇気づけが効果的であることも述べている。実際の場面では、女子たちから教材を選ぶことを楽しむ反応や、自身の要望を伝える反応がみられ、その反応に研究者が肯定的共感的に関わっていた。このように日常の場面でも、好きなものを選択できる工夫や、自己決定をして意思表示を行う場面を作る工夫、加えて他者がその行動に共感して肯定的に関わることで、女子たちが自分の欲求に意識を向け他者に要望を伝えて欲求を満たしていくというコミュニケーションのプロセスを経験できる。自己の判断で行動することは、エンパワメント、有能感、自己評価、自由（不束縛）感が促され、ケア提供者への信頼感につながり、基本的安全感と自己管理につながる (Herman, 1992) といわれている。このことから、何気ないやりとりの中で判断や選択をゆだねられ、その決定を受容的共感的に受け止められる経験を重ねることによって、女子たちは“自身が存在していて良いのだ。”と自己の存在への評価を肯定的なものとしてできると考えられる。女子たちが自己を肯定的に捉えられるような工夫によって、女子たちは自己への信頼や自己を認めてくれる他者への信用を高められることが示唆される。

また、アタッチメントの発達に問題がある子どもは、自己や他者の感情を認識する能力が低下する (庄司他, 2008) ことが指摘されており、これについては実際に、妊婦ジャケットの腹部を叩いたり、新生児人形の首をつかんで揺らしたりするという女子たちの行動がみられた。この行動は、研究者の反応を観察するための試し行動であるとともに、大きくなった腹部や新生児人形に対する想像力の脆弱性による行動であることが推察される。この行動に対して研究者は、女子たちの言動を否定せず、タッチングを行いながら、目の前の他者を想像できるような声かけを行った。この関わりをきっかけとして、女子たちは妊婦ジャケットの腹部や新生児人形を優しく扱うように変化した。これは、女子たちにとって、優しく温かい身体感覚を

知覚する中で、自身が大切にされる感覚を得られる経験となり、そこから他者を労わることの大切さを想起し、他者を大切に扱うという行動の変化につながったと推察する。

このように基本姿勢を土台とした関わりに、場面に応じた工夫を加えることによって、女子たちの低い自己評価を肯定的なものとする意味や他者を思う力を養う意味があったと考える。

4. 今後に向けた課題

1) 年齢に配慮した関わり

一般的に中学生より高校生の方が自立性は高くなり、井出 (2017) は施設児童についても同様の結果を得ている。「いのちとからだのお話」においても中学生女子に比べて高校生女子の方が、テーマを捉え積極的に発言しながら参加していた。また、柚山 (2017) は児童養護施設の中学生女子が、月経の相談について大人への相談を避ける様子があることや、周囲との関わりについて自分の感情の不安定さを自覚し、人との摩擦を避ける対処行動をとる様子があることを指摘している。このことから、「いのちとからだのお話」にて中学生女子たちにみられた、関わりに対する反応が少ないことが、単にお話への参加に否定的ということではないと推察する。女子によっては年齢的な要因によって、自身の感情の不安定さから他者との関わりに自信を持ってない可能性がある。加えて、アタッチメントの問題がある場合は、前述したとおり、他者を信用できず回避したりする行動によって他者関係が阻害されることがある (庄司, 2008)。これらの特性を踏まえて、関わりに対する反応が少ない場合でも、女子たちの反応を無視せず、女子たちの考えや感じていることに視線を向けている態度を見せ続ける必要があると考える。

2) アタッチメント関係のネットワーク作り

虐待を受けて育った子どもは一般に自己評価が低いことが指摘されており (庄司他, 2008)、高校生女子との会話においても、自身について「大切ではない」「どうでもいい」という発言がみられた。被虐待者への治療的関わりとして、Cruz 他 (1994) は、受容的な態度によって対象の自己信頼と自信が強まると述べており、これは児童養護施設の女子たちにも、適応する部分があると推察される。「いのちとからだのお話」のような受容的な姿勢で関わりを継続することで、女子たちが自己への信頼や自信を高めていけることが期

待できる。人生早期のアタッチメント関係に何らかの問題や外傷を抱える子どもも、その後に出会う新たなアタッチメント人物との関係性や、周囲の人との温かい対人ネットワークにより、発達のリスクが保障される可能性がある（庄司他，2008）と言われている。このことから、「いのちとからだのお話」で助産師と関係を築いたように、施設職員以外のアタッチメント関係を形成してネットワークをもつことが、女子たちの社会情動発達に良い効果をもたらすことが示唆される。

3) 入所時から退所後も含めた継続的な関わり

高校生女子の発言から将来について想像し、期待や不安を抱えていることが分かった。大村（2014）は、児童養護施設退所者の自立について、様々な問題が内在化しており、家族基盤の脆弱な彼らには、一般的な青年よりも、さらに長いモラトリアム期が必要であることを指摘している。施設退所後の子どもへの支援としては、18歳以降の措置延長制度の活用や退所児童等アフターケア事業の推進がされており、住居、家庭等の生活上の問題や就労上の問題への相談対応等が行われている。しかし、前述したように、児童養護施設の女子たちは、将来社会に出てから性的な健康問題を抱えるリスクが大きいことに加え、対人関係の問題や自己感の統合不全の問題を抱えていることがある。このことから、女子たちには長期的な視点で、受容的共感的な関わりを継続しながら、性や身体についての支援を行う必要がある。そのため児童養護施設入所中から女子たちとの関わりを継続し、母親のように自然に性や身体について話題にできる信頼関係を築いておく必要があると考える。さらに、今後は、退所後も必要時に女子たちの性についての指導や支援を行えるような支援方法や支援体制を整えていくことが求められると考える。

4) 女子たちとの関わりにおける境界を示すこと

被虐待経験者への治療において、支援者が対象者に強さを見出そうとせずに尽くしすぎると、対象者の依存心を増大させ、自律性、自己価値および自己決定力を減退させる（Cruz 他，1994）と言われている。児童養護施設の女子は、他者に頼ろうとする傾向が高い（井出，2017）ことから、不安や悩みを表出できる強みを持つ一方で、その傾向が強くなると他者に依存的になりやすい側面を持っている。女子たちとのやりとりでは、関係性が築かれ始めると高校生女子においては、積極的な自己開示の反応がみられた。女子たちとの関わりが献身的になりすぎることによって境界が

曖昧になることは、女子たちにマイナスな影響を与えてしまう可能性があることを意識し、関係の境界は明確に示す必要があると考える。「いのちとからだのお話」で高校生女子たちは、気づきを共有し、学びを深めている場面があった。ここから、問題やリスクを意識しすぎて、女子たちが力を発揮できる場面を妨げることのないように、必要に応じて見守りのケアをおこなうことも必要であると考え。女子たちの問題解決プロセスを支持し、結果を含めて受け入れる過程を女子たちと共有することが、女子たちとのより強固な信頼関係の構築になることが示唆される。

おわりに

今回、B 児童養護施設の女子を対象に助産師がおこなう性やからだに関する保健指導である「いのちとからだのお話」を実施した。実施にあたっては、施設職員との事前の打ち合わせを重ねて、受容的共感的な基本姿勢で女子たちと関わり、丁寧に関係性を築いたことで、女子たちの反応や研究者との関係性に変化が確認された。今後はさらなる関係性を構築し、信頼関係を深めることが、女子たちの社会情動発達に効果をもたらす可能性が示唆された。さらに入所中だけでなく退所後も女子たちへの支援が継続して行える支援方法を検討していく必要があることが明らかとなった。

謝辞

本報告をまとめるにあたり、ご承諾いただきました B 児童養護施設の皆様、ならびに今回の保健講話の計画・実施から報告の作成においてご指導ご鞭撻をいただきました岩手県立大学看護学部教授福島裕子先生に心より感謝申し上げます。

引用文献

- Bessel A. van der Kolk, Alexander C. McFarlane, Lars Weisaeth (1996/ 西澤哲 2001) : トラウマティック・ストレス PTSD およびトラウマ反応の臨床と研究のすべて, 誠信書房, 東京.
- 出野美那子 (2008) : 児童養護施設における青年期前期の子どもの愛着状態と心的外傷症状, 発達心理学研究, 19 (2), 77-86.
- F・G・Cruz, L・Essen (1994/ 倭文真智子 2001) : 虐待サバイバーの心理療法 成育史に沿った包括的アプローチ, 金剛出版, 東京.
- 藤林武史 (2016) : 虐待被害からの回復を促す社会的

- 養護環境とは，児童青年精神医学とその近接領域，57 (5)，54-64.
- 福島裕子 (2016) : 児童養護施設思春期女子へのリプロダクティブ・ヘルスケア介入プログラムの開発と評価，科学研究助成事業 成果報告書. <https://kaken.nii.ac.jp/ja/report/KAKENHI-PROJECT-26463382/26463382seika/> [検索日 2020年1月2日]
- 福島裕子 (2018) : リプロダクティブ・ヘルスケアに求められるもの—ジェンダー・アイデンティティ形成と自己決定を促進する要因から考える—，岩手看護学会誌，12 (1)，3-15.
- 古川洋子 (2008) : 児童養護施設で助産師が実施する性教育に関する一考察，滋賀母性衛生学会誌，8，46-50.
- 井出智博 (2017) : 児童養護施設で暮らす子どものレジリエンスの特徴，福祉心理学研究，14 (1)，44-53.
- J・L・Herman (1992/ 中井久夫 1999) : 心的外傷と回復，みすず書房，東京.
- 厚生労働省子ども家庭局厚生労働省社会援護局障害保健福祉部 (2018) : 児童養護施設入所児童等調査の概要，https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_09231.html [検索日 2020年1月23日]
- 牧田浩一，伊藤英世 (2018) : 児童養護施設の中高生のアタッチメント・スタイルと特性不安の関連，北星学園大学社会福祉学部北星論集，55，79-88.
- 大村海太 (2014) : 児童養護施設退所者の自立に関する一考察，駒沢女子短期大学研究紀要，47，49-60.
- 榊原文，藤原映久 (2010) : 児童養護施設入所児童の性問題行動について—児童養護施設職員へのフォーカス・グループ・インタビューを通じて—，子どもの虐待とネグレクト，12 (3)，386-397.
- 石曉玲 (2006) : 児童養護施設における子どもの情緒的・行動的問題アセスメント—被虐待児を中心とした治療の対応をめぐる—，臨床教育心理学研究，32 (1)，1-8.
- 庄司順一，奥山真紀子，久保田まり (2008) : アタッチメント 子ども虐待・トラウマ・対象喪失・社会的養護をめぐる，赤石書店，東京.
- 鈴木幸雄，佐藤秀紀，秋元洋志，他 (2002) : 児童養護施設における児童の問題行動と保護者の抱える問題に関する実証的研究，北海道医療大学看護福祉学部紀要，59-76.
- 友田尋子・安藤千恵・大岩尚美 (2008) : 児童養護施設の福祉職が実施する子どもの健康にかかわるケアの実際～福祉職の語りから得た現状と問い～，日本看護福祉学会誌，13 (2)，13-26.
- 山本真理子，松井豊，山成由紀子 (1982) : 自尊感情尺度，堀洋道，心理測定尺度集Ⅰ—人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉—，29-31，サイエンス社，東京.
- 山下洋 (2019) : アタッチメントの精神医学愛着障害と母子臨床，日本評論社，東京.
- 柚山香世子 (2017) : 児童養護施設に入所している思春期女子の心身の変化の特徴，千葉看会誌，23 (1)，53-61.
- (受付年月日 : 2020年11月30日 受理年月日 : 2021年2月4日)

< Practice Report >

Efforts and Involvement in Practical “Talks about Life and the Body” by Midwives with Adolescent Girls in Orphanages

Saori Ito
Iwate Prefectural University

Keywords : Orphanage, Adolescent Girls, Midwives, Life, Body